

「地上という牢獄」ー社会と共同体をめぐるアーレントとプルードンの対話可能性ー

伊多波宗周（京都外国語大学）

アーレントの『人間の条件』は、スプートニク 1 号の打ち上げの際に社会からとっさに出た言葉が、「地上という牢獄から人間が解放される第一歩」だったことに注目して始まる。そして、オートメーションによる「労働の解放」が実現する社会が、それにもかかわらず、やるべきことが労働しかない社会であること、これを「深刻な事態」と呼んで、近代の労働賛美の議論への批判へと論が展開される。ところで、プルードンは、労働者からなる理想的な社会像を提示した人物であり、アーレントからの言及も多い。プルードンは、主権概念の批判から始め、晩年には政治と経済の双方にまたがる漸進的自由の秩序としての全面的連邦制を提唱する。他方で、家族という共同体が権威の領域であることを一貫して主張し、土地の占有と相続の重要性を強調した。その点で、プルードンは、人間の条件からの解放を目指すユートピア思想とは大きく異なる。提題では、上記の議論を整理し、最終的に、「不死性」の概念に注目して、両者の対話可能性について述べたい。